

*MAITRE ECKHART A PARIS. Une critique
médiévale de l'ontothéologie.*

Études, textes et traductions par Émilie Zum Brunn, Zénon Kaluza, Alain de Libera, Paul Vignaux, Edouard Wéber.
(Bibliothèque de l'école des hautes études sciences religieuses,
vol. LXXXVI)

Presses universitaires de France, 1984, pp. 234.

渡部 菊郎

本書は、エックハルト（以下Eと略）の「前期パリ討論集」に関するフランス国立科学研究所（C. N. R. S.）研究員の共同研究の成果であり、Émilie Zum Brunnの責任編集により出版されたものである。副題からも判るように、第1部は4人の研究者による4篇の研究論文よりなり、第2部はZ. Kaluzaの文献学的考証を序文とし、パリ討論集問1（E. Wéber 訳・注）、問2（年代的・内容的に関連するラテン語説教 XI-1, 2, XXXIX を含む。É. Zum Brunn 訳・注）、最後に rationes Eckhardi を含む Gonsalvus Hispanus（以下Gと略）の間（A. de Libera 訳・注）に各々詳細な脚注を付した対仏訳テキストよりなる。（写本の秩序に従った Deutsche Forschungsgemeinschaft の批判的校訂版に対して、考証された年代順に編集し直されており、Text 番号が異なっている。）訳文や文献学的考証に関して論ずる資格は評者にはないので、ここでは第1部の研究論文を中心に紹介してゆくことにする。

最初の研究はドミニコ会士 E. Wéber による、*Eckhart et l'ontothéologisme* である。「パリ討論集」（以下QPと略）におけるEの主要なテーゼは、神を存在でなく知性（認識）とすることにある。さて、Eにおける *esse* と *intelligere* との関係をとマス・アクィナス（以下Tと略）との関係からTextに即して克明に分析したものとしては既に Imbach, R., *Deus est intelligere. Das Verhältnis von Sein und Denken in seiner Bedeutung für das Gottesverständnis bei Thomas*

von Aquin und in den Pariser Quaestiones Meister Eckharts. 1976, Editions Universitaires があるが、本研究では更に広く当時のパリ大学の時代状況と論争点からEのテーゼの意味を浮かびあがらせようとしている。まずドミニコ会士であり、パリ大学の神学部教授としてのEの歴史的な位置づけをなし、QPの主要論点を、1. esse 2. intelligere 3. beatitudo の3点に即して当時の問題状況の中で捉えなおす(第1章)。次に esse と intelligere に関するパリ大学での論争を歴史的に整理する(第2章)。著者はまず Jaque de Viterbe (1293~1300 のパリ大学神学部教授)の Utrum Deus dicatur vere ens? (彼は肯定)を検討し、Eの対立者であるGや Scotus 等フランススコ会士側の見解を吟味してゆく。Scotus は第1概念としての ens は神にも被造物にも univoce に語られるとして、intelligere に対する ens や essentia の優位を主張しているが、他方ドミニコ会の Albertus Magnus は *Met.* V 巻の解釈から神を最高原因としての自己を思惟する思惟と捉えている。それは勿論、アウグスチヌス以来の神の創造のアイデアの思想を含んだ Arist. の解釈であり、Tも神の esse を intelligere として神は intelligere (と velle 註: 評者の附加)によって全ての res の原因であるとしている。EのQPのめざすところも intelligere を超越的一性のもとに展開することであり、ドミニコ会側に位置している。しかし特に問題となるのは、アウグスチヌスの伝統において魂の実体一附帯性と捉えられている被造的知性における esse と intelligere の関係をEが逆転させた所である。著者は単に主意主義に対する主知主義の主張とする考えを退け、13Cに再熟した自己認識の問題展開、及び御言葉の発出をめぐる論争の中でQPを吟味し直す。著者は、EはTの立場に立つが、神の essentia を御言葉の per modum intellectus な発出を引きおこす species intelligibilis の如く捉え、超越的な principe noétique として人間の intelligere の principium として捉えていると解釈している。更に著者は、Eのテーゼを理解する鍵ともなる魂における御言葉の誕生の説を Dionysius の Théophanie をめぐる13Cパリでの終末論的至福に関する論争点の中から解明してゆく(第3章)。Bonaventura をはじめ、フランススコ会側は被造的精神の愛による神との一致を主張し、アリストテレスの影響を受けたドミニコ会側は知性的見神を主張する。Tは神と被造知性との間の essentia や natura による unio は不可能であるが、被造的 essentia の actus としての esse

という彼に固有の立場から超自然的恩寵による *actualitas* の次元での知性的見神を認めている。著者はそれを単なる主知主義とは解さず、救済のための、神の被造的精神への啓示の事実、受肉した御言葉への覚醒の *contemplatio* と解釈し、Eもその立場にあると解釈している。又、Tにおいて神の *intelligere* は *esse* の原因であり、*esse* は吾々の *intelligere* の原因であるが、人間知性は *obiectum formale* として *ratio entis* を持つが、*obiectum proprium* は *corporea* の *essentia* であるという基本構造に基づき、Tは神に至る否定の道をとっている。GやScotusはTやHenri de Gandの *semi-ontologisme* に対立する。ScotusはTの知性対象の2つの区別を取り去り、知性の第1の対象は神にも被造物にも (*conceptus deminutus Dei*) *univoce* に語られる *ens commune* であるとし肯定の道をとる。著者はEの「否定性」はGやScotusの *univocité* の説に向けられており、Dionysius的な否定の道をとるドミニコ会の伝統の中にあるとする。Eは被造的精神における *esse* と *intelligere* との関係の逆転と至福への否定の道により、*esse* の充満である神の *intelligere* への被造精神の *extatique* な構造を示そうとしていると結論しつつ、QPを13・4Cのバリ大学の神学論争史の中に位置づけてゆく。

第2論文はÉ. Zum Brunnの *Dieu n'est pas être*、第3論文はA. de Liberaの *Les "raisons d'Eckhart"* と題され、第2部で訳出されるTextの研究である。この2人は別に *Maitre Eckhart. Métaphysique du Verbe et Théologie négative*. 1984. Bibliothèque des Archives de philosophie 42, Beauchesne というEの研究書(大森正樹氏による邦訳が国文社より出ている)を共著で出版している。É. Zum Brunnの論文はEの *esse* の把握を i) *Exodus* 3, 14 に関する *Philon Judaeus*、教父を経て展開する神=有るものとする説と ii) 神は全ての名を超出しているとする新プラトン主義の伝統、そして存在を被造物の第1のものとする原因論第4命題との総合発展としてみる(ドイツ語説教の *wesen wesenlos überwesendes Wesen* 等)。そしてEの思想の展開を3つの時期に分け検討してゆく。i) QPに先立つ *Collatio* や「教導講話」においてEは神の本質の不変性・単純性を示すために「あれ・これで有らぬ」と否定的に語る。又被造物を突破し神を人間のうちに本質的な仕方 *in einer wesentlichen weise* 現前させる人間の救済を私的被造的存在の否定の内 *in* にみる。それはEの神や精神的生の *ontologique et surontologique*

な表現であり、「否定」は教父以来の Dionysius の否定の道に立っているのである。

ii) *QP* の *méontologique* な表現もその展開上にある。Eは神を、被造物に帰される *ontologique* な秩序から除外しつつ *non ens* とし、被造物ばかりでなく神にも帰される *esse* の *fundamentum* として *intelligere* とするが、それは Gilson の言うように反トマス的なのではなく、Eは神における *esse* と *intelligere* との同一性を認め、*intelligere divinum* と同一視された *esse* の概念を被造的 *ens* との全ての *analogia formalis*, *univocité* から純化して、*puritas essendi* となしているのである。神の *temple* としての被造的知性はいま・この被造物を *denuter* する、即ち被造物を神の内でも知り得る能力であり、神と区別のない一つの神の *Imago* である。その点で *increatedum* とされる。iii) *QP* 以降「3部作」の時期に至って *deus est esse* と言われるが、それはEの立場の変更を意味するものではない。Eは同じように *esse* の被造的意味（原因論第4命題）と、純粋な *intelligere* である *esse*（神）の純粋性とを分けているのである。表現の変化はむしろ Klibansky の言うように魂の受動性の強調や、知性を魂の根底とし、神の根底へ向かわせることの表現のために、*esse* と *intelligere* との関係を示す議論がより豊かに細やかになっているのである。著者はEの中に *ontologie* から *méontologie* への転向や無の神秘主義をみる見解を退け、神と魂とに共通の存在をめざす無媒介の知の深化を認めてゆく。

第3論文は、*Le problème de l'être chez Maître Eckhart: logique et métaphysique de l'analogie*, 1980 Genève の著者である A. de Libera による *rationes Eckhardi* に関する研究である。彼はまず2つの写本に関する Geyer の説を検討し、GとEとの論争点を魂の *potentiae* をめぐるフランシスコ会側との論争と「仮説」を立て Kulza の研究に基づきGの *Text* とEの *rationes* とを並記・比較しつつ緻密に問題点を整理する。そして *rationes* にあらわれるEの *ontologie* をT的か Dietrich 的かという問題設定の下に逐次検討を加えてゆく。そして知性の対象となる *ens inquantum ens* がEの *nuda entitas rei* に対応するかどうか、Eの *entitas* 概念が解明される。著者は A.M.Goichon の研究に従い、能動知性の「抽象」がしばしば *denudatio*, *expoliatio* とラテン語されること等々からTとの連関をみ、確かに R. 5 の能動知性の捉え方は Dietrich 的であるが、R. 3 に

Dietrichの影響をみる必要はなく、EがTに反対している訳ではないことを示してゆく。

第4論文は Paul Vignaux による *Pour situer dans l'école une question d'Eckhart* と題されている。Gilson はEの立場は直接Tの立場に対立するとした。著者は中世のカルメル会士のバリ大学教師の説、特に Antoine de la Mère de Dieu (1583-1637) の *Cursus Theologicus* の De Deo を紹介しつつ「EとTとの対立」に対しトミズムの他の解釈の可能性を示してゆく。Antoine は他のトミスト達が *constituens formale deitatis* を *esse ipsum subsistens* とするのに対し *intelligere subsistens in actu* とした。又Tの *esse divinum* を *intelligere radicale* として神の *essentia, natura* を構成するものとして“純粋な” *ipsamet intellectio* とする。そして御言葉の発出に関しての *esse, intelligere, velle* の関係を紹介してゆく。それを通して「観念論」に対立しようとした Gilson を含む20Cの新トミズムの「自己理解」に対して控え目ながら深い問題提起をなしてゆく。

以上が簡単ながら研究論文の趣旨である。Eの生きた時代の精神的状況を克明に追いつつEの問題と発語されたテーゼのもつ歴史的意味を浮かびあがらせ（第1論文）、Eの思想の神学・哲学的意味を探る（第2・3論文）。更に Gilson 以来の現代の吾々の研究視点に反省を求めつつ（第4論文）、批判的校訂を経た Text の対訳と注釈（第2部）を提供するという本書の試みに敬意を表したい。このバリの伝統に根ざした地道な実証的研究を踏まえた上での説得力のある論旨、及びまるで一人の著者による書物のように感じさせる“共同研究”の成果から、単にE研究上の学問的成果ばかりでなく、われわれの研究方法・態度についても教えられるのは、評者一人に留まることはないと思われる。